

クリエイティブサロン「めくるめくマン盆栽ワールドへようこそ」報告

武庫川女子大学生生活美学研究所助手 松 山 聖 央

はじめに

生活美学研究所では、例年「クリエイティブサロン」として、学生や教職員、近隣の方向けに、ものづくりのワークショップを行ってきた。しかし、2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大により対面での事業がことごとく中止に追い込まれるなかで、内容・実施形態ともに再考を迫られることとなった。本報告では、こうした異例の状況においてワークショップを企画・実施した経緯を記録するとともに、「マン盆栽」という創作活動について生活美学の観点から若干の考察を試みたい。

1. コロナ禍におけるオンライン・ワークショップの可能性

今回のクリエイティブサロンの企画においては、やはり、制作系のワークショップを「オンライン」で実施するという制約をいかにクリアするかが最初の課題であった。とはいえ、生活美学研究所では、2020年度に入ってからオンライン会議ツール zoom を用いた研究会は積み重ねてきており、技術や環境面ではなんとかかなりそうだというイメージはあった。むしろ、料理、手芸、DIY、あるいはヨガなど、あらゆるジャンルのインストラクションがインターネット上の動画で手軽に楽しめる昨今、あえて限られた人数で、双方向のコミュニケーションをとりながら、クリエイティブな時間を共有しつつ、また生活美学研究所の年間テーマである「場」を意識しながら、さらには欲をいえば、ただつかの間の手慰みに終わるのではなく、コロナ禍という状況そのものにも、考えをめぐらす機会にできればという目論見があった。

そうしたことをつらつらと考えているなかで、ふと、特段の脈絡もなくふと、思い当たったのが、「マン盆栽」であった。「マン盆栽」がいかなるものであるかについては次節で詳述するが、私がこれを知ったのはたしか大学生のころで、テレビか雑誌といった媒体で紹介されていたのを偶然目に留め、興味を抱きはしたものの、その時点ではそれ以上調べたり、自ら制作に手を染めたりするまでには至らなかった。それ以降、同様の紹介記事にも、実物にも巡りあう機会はなく、しかしそれでいて、忘却の彼方に消え去るのでもなく、指に刺さった小さな棘のように、ふだんは意識の底に埋もれながらも、ときおり頭をもたげて気になりだす——「マン盆栽」は私にとってそのような存在だった。芸術との出遭いには往々にしてそのようなことがある。つまり、必ずしも雷に打たれたような衝撃とともに訪れる遭遇ばかりではなく、初対面ではぼんやりとした印象だけを残した作品が、しばらくの時を経て、突然明確な輪郭を得て、心に舞い戻ってくることがある。ワークショップ、オンライン、「場」、ステイホームといった、2020年度の特異な状況を示す点がつながった先に、舞い戻ってきたのが「マン盆栽」だったのである。

2. めくるめく「マン盆栽」の系譜

では、その「マン盆栽」とは何か？これは、マンボ・ミュージシャンのパラダイス山元氏が家元として創始した、いわば盆栽の進化形あるいは変化球と呼びうるもので、従来は、樹木および石や苔で構成される盆栽に、人間の姿をした小さなフィギュアを配置して、物語性のある情景を生む創作活動およびその成果としての作品である。「マン盆栽」という呼称は、もともとは山元氏のミュージシャンとしての活動にちなんで、「マンボ+盆栽」に基づく造語だったとご本人は語っている⁽¹⁾。しかし、人口に膾炙する過程で、「人間の姿のフィギュア=マン」だから「マン盆栽」、「ヒューマンな盆栽」だから「マン盆栽」といった、家元の意図を超えた偶然でありながら実を射た解釈も生まれてきた⁽²⁾のが興味深い。

ところで、ここでも何気なく「情景」という語を用いたが、この語にはたとえば「風景」や「光景」とは異なる含意がある。さしあたって手近な辞書を引けば、第一の語義としては「感興とけしき。心のはたらきと自然の風景」が挙げられている。二つ目には、「人の心に何かを感じさせるような、自然の景色や、具体的な場面」ともある⁽³⁾。加えて、日本では、英語の「case」の訳語として、『哲学字彙』（1881年）⁽⁴⁾に初めて登場したという。さらに『改正増補和英英和語林集成』（1886年）⁽⁵⁾では、日本語の見出しとして「情景」が立てられ、「arisama（ありさま）」という説明とともに、「state」と「condition」が対応する英単語として記載されている。翻訳の歴史に垣間見えるこうしたニュアンスを念頭に置けば、「情景」とは、たんに眼に映じる対象の視覚的な外観を指すのではなく、眼前に展開される出来事の趨勢と、それに呼応する鑑賞者の側の心の状態の変化の総体を意味すると言えるだろう。ただし、現在では「風景」や「光景」と同様の意味で、視覚的な眺めを指す「景色」も、もとは「気色」だったということを思い起こせば、日本の文化においては、客観としての眺めと主観としての鑑賞者の心的様態はそもそも切り離されて存在するものではなく、ある眺めからなんらかの感興を呼び起こされること、あるいは反対に、すでに胸の内にあった気分や情感を眼前の眺めに投影するという経験は慣れ親しんだものでもある。しかし、近代化と西欧化の過程で、日本においても「眺め」と「気分」に象徴される「客観」と「主観」は、別々のものとして断絶してしまったところがある。マン盆栽に配された小さな人間は、いわば鑑賞者の導き手として、感情移入の拠りどころとして、自然の事物と私たちの心が断絶を超えてふたたび共鳴することをうながしているように思われる。

一方で、近代以降に日本で発展してきたのは、おおまかにいえば、幹や枝ぶりを作り込みながらも、あからさまな作為の表出を避け、なんらかの対象の再現ではなく自然の抽象性それ自体の造形を洗練させようとする盆栽である。その感覚からすれば、人型のフィギュアのみならず、ときに場面をより正確に説明するための小道具まで持ち出して、非常に具体的な情景を構築するマン盆栽は邪道のようにも思われる。しかし、もともと日本に盆栽を伝えた中国で発展した「盆景」では、樹形をより大げさに整えながら、動物の置物などを配して、「徹底的に景を作り込」むスタイルも見られるという⁽⁶⁾。また、江戸後期から明治期の前半にかけて活動した浮世絵師・小田切春江（歌月庵喜笑）が記した『名陽見聞図会』は、当時の「鉢山」の流行の様子をつぎのように伝えている。

此節、諸所に鉢山の会あり。珍らし。扱、此鉢山といへるハ、ひらたき鉢の中に、岩・小石・苔などをもって、山水のかたちを作り、少き人形・堂塔・或ハ民家・松・柳・海など、焼物の手遊

びをならべ、風景よく仕組みし物也。

扱、鉢山と云事のおこりは、大坂の富家、諸国に名たゞる景地を、何卒目前二見たきとて始て作り出せし物也とぞ。夫方此地へも流行来るよし也。⁽⁷⁾

「少^{ちさ}（原文ママ）き人形・堂塔・或ハ民家・松・柳・海など、焼物の手遊びをならべ、風景よく仕組み」⁽⁸⁾ というあたりは、まさにマン盆栽さながらで、また、それが大阪に端を発して流行していたというのも面白い。この文章には絵も添えられており、大きな鉢に山から海までを含めた複雑な景を仕立てたものから、貝殻のうつわのこじんまりしたものまで（図1）、以下の文章とともに描かれている。

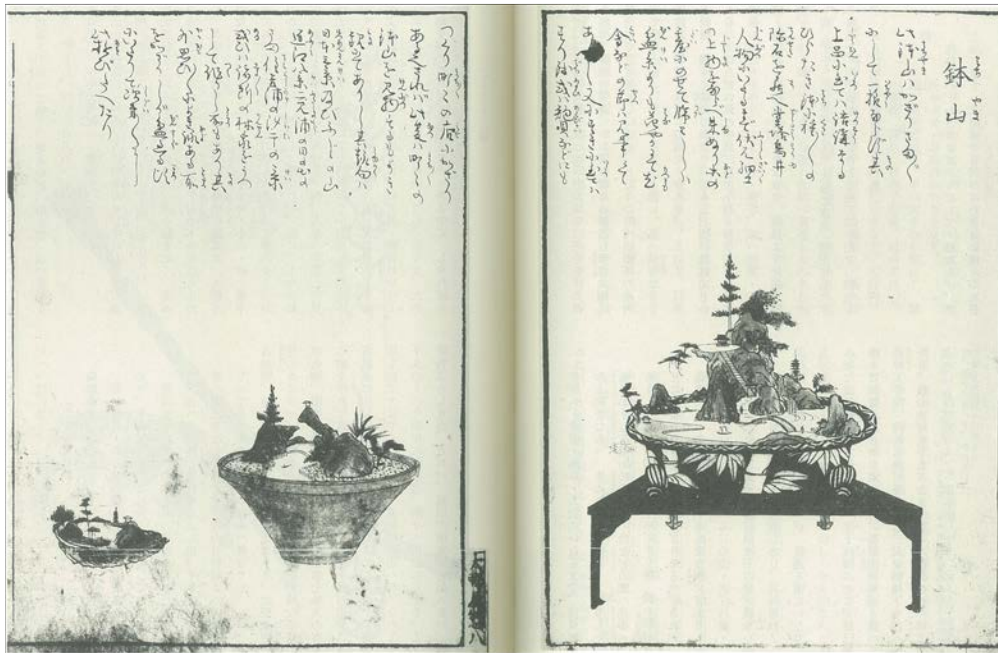


図1 江戸時代後期に流行したという「鉢山」（歌月庵、208-209 頁より転載）

此鉢山ハ、かざりさまざまにして一様ならず。其上品に至てハ、結構なる、ひらたき鉢に種々の珍石を居へ、堂塔・鳥井・人物にいたるまで、伏見細工の上物をならべ、朱ぬり等の台にのせて飾りしハ、盆景よりも花やかにて、尤、会などの節ハ見事ニてありし。又、にすきに至てハ、すり鉢、或ハ鮑貝などにもつくり、町々の店にかざりある也。されバ、此の夏ハ町々の鉢山を見物するもよき観にてありし。⁽⁹⁾

そして、「其趣向ハ日本三景及び、ふじの山・近江八景・二見浦の日の出のさま・住吉浦の汐干の景、或ひハ諸所の林泉をうつして作りし所もあり」⁽¹⁰⁾ と書かれているように、どのような景を作るかという点は自由で多様でありながらも、いわゆる名所の再現が一定の人気を集めていたことが見てとれる。つまり、鉢山はいわば名所絵の立体版として、流布していたということだろう。実はパラダイス山元氏の作品でも、「城ヶ崎海岸」⁽¹¹⁾ や「太陽の塔」⁽¹²⁾ など、実在する有名な観光スポットを再現したり、ガチャポンのシリーズ物のフィギュアを使って、漫画／アニメ作品『巨人の星』の一場面を構成したもの⁽¹³⁾ がある。伝統的な「名所」とはやや趣が異なるものの、作り手がただ独り愛でるのみならず、多くの人を知る場所や既存の作品の場面をテーマにすることで、

共同体のメンバーが集散的に情景を共有し、享受しようという意識においても、鉢山とマン盆栽にはつながりが見られる。

ちなみに、さらに続く春江の記述によれば、同じ時期の夜店では「人形・岩などを始、かる石にて作りし手水鉢・小石・砂・植木」といった「鉢山の道具」を売る店が多数並んでおり、「どの店も大流行にて繁盛」していたとのことで、当時のブームの過熱ぶりがうかがわれる⁽¹⁴⁾。ただ、ブームにあやかって「鉢山田楽餅」なるにわか名物まで登場したものの、「盆過る頃にいたりて、次第次第に此遊びたへたり」とのことで、廃るのも早かったようである⁽¹⁵⁾。

日本には、少なくとも王道としては根づかなかった「鉢山」的盆栽の系譜だが、別の中国文化圏の国であるベトナムには広く見られるようだ。ドイツ出身で、フランスを拠点に活動した中国およびチベット学者のロルフ・スタンは、ハノイの市場で見かけた盆栽の一種（図2）をつぎのように描写している。

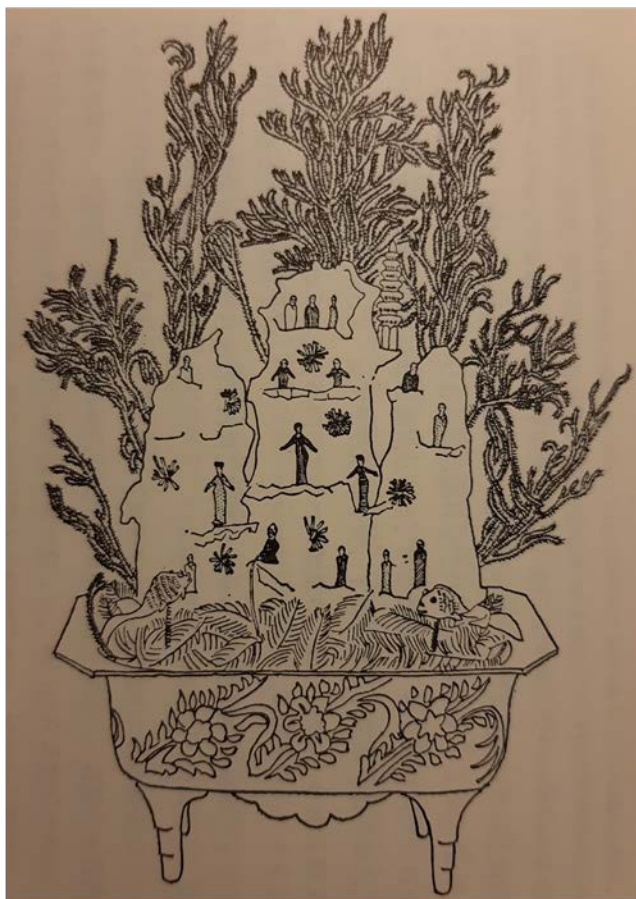


図2 ベトナムの簡易版「ヌイ・ノン・ボ」
（スタン、169頁より転載）

それはかたいパルプで作った三峰の山で、黒く色ぬられ、板紙の箱の中央にそびえている。この箱の内部はバラ色と緑色のけば（水を表している）でおおわれ、パルプ製の二匹の金魚がスプリング上に固定されている。また山は星のような花でかざられ、さまざまな色（白、紅、黄、緑、青の各色）の服をまとった人形がそこに散在している。この人形は、水辺に腰かけた釣り人であったり、「夫人」（徳婆）であったり、「聖母」であったりする。さらに中央の峰には、七重の塔がたてられ、山全体は、緑色の綿毛におおわれた木でふちどられている。その高さは全体として十センチメートルほどである⁽¹⁶⁾。

スタンによれば、ベトナム語ではこうした盆栽の類を「ヌイ・ノン・ボ」と呼び、「ミニチュアの山」を意味するこの言葉は、漢字では「假山」と書き表される。家や寺院では、水槽のなかに岩山をしつらえ、人形を配置し、さらに水中には本物の金魚が泳いでいる「ヌイ・ノン・ボ」がよく見られるそうだが、この市場の品は、岩や植物の部分も人工の模造品で再現した、より簡易なタイプということだろう。限られた鉢の空間の中に自然を造り込む盆栽がすでに人為の産物であるとすれば、この事例は、その盆栽をさらに人為的に再現した造花ならぬ造盆栽ともいえるが、「ヌイ・ボン・ノ」がそれだけ大衆に浸透していることを示している。そして、ベトナムではただ自然の景を再現・表現することのみならず、宗教上の儀礼や古い神話の世界に遡る物語を想起させる造形を生み出すことが「ヌイ・ボン・ノ」文化の根底にあるという⁽¹⁷⁾。

以上のように、江戸時代に流行した「鉢山」やベトナムで発展した「ヌイ・ボン・ノ」など、幅広い盆栽の系譜にも目を向ければ、実は「マン盆栽」の類縁的な形態が存在することは興味深い。

日本で発展を遂げた、人為と自然がぎりぎりの拮抗を見せる洗練の極致には、もちろんその良さがあるが、人為の介入を当たり前の前提としてミニチュアの人や動物を遊ばせる「マン盆栽」的造形は、私たち人間も含めた万物を受け入れる世界、あるいは宇宙を、しかし気負うことなく生み出そうとするほのぼのとした軽やかさに、その大きな魅力があると言えるだろう。

3. レッツ・マン盆栽

それでは、この節では、記録も兼ねて実際のワークショップについて、準備段階から当日の運営に至るまでを簡潔に記しておきたい。

冒頭で述べたように、新型コロナウイルスの感染拡大状況を鑑みて、今年は zoom を用いたオンラインのライブ形式での開催となった。リモートでの事業実施にはメリットもデメリットもあることが、すでにこのころまでに実感として分かってきていたが、メリットとしては、遠方の人でも参加しやすいこと、定員を多めに設けやすいことがある。一方で、手を動かす制作ワークショップの場合は、作り方がきちんと伝わるだけでなく、バーチャルとはいえ同じ場で、同じ創作活動に取り組む参加者たちの一体感が重要でもある。このことを考慮して、今回は武庫川女子大学の学生を中心に、希望する教職員も若干名加え、学内限定で行うことに決定した。

外部の一般参加者にも募集をかける場合はハガキのダイレクトメールを送付し、HP や SNS での告知も行うが、今回は学内電子掲示板を活用して周知を行い、google フォームを応募用プラットフォームとして活用した。zoom をはじめとするオンライン会議ツールと並んで、google フォームもコロナ禍において使用の機会が高まったツールのひとつだろう。アンケートの作成などが基本的な目的として想定されているが、「氏名」「メールアドレス」「所属」などの項目を自由に設定することで、今回のように申込フォームとしても利用できる。web 上でこのフォームにアクセスするための URL を生成でき、さらに集めたデータは google スプレッドシートで集計できるため、HP 上などで独自の申込フォームを構築するよりも簡便に、データの収集・管理が可能である。ただし、生活美学研究所では、コロナ以前まではイベントの申し込みは電話またはメールで受け付けており、インターネットの使用が難しい参加希望者がいる場合もある。運営側としては、イベント自体の開催形態が対面に戻ったとしても、google フォームは申し込みや事後のアンケートの手段として非常に使い勝手がよいと感じるが、ツールによって利用可能者に線引きが生じてしまうという点は、今後検討すべき課題だろう。

オンラインツールを活用して無事に参加者が確定したのち、当日までにすべきことは材料の配布であった。このワークショップでは、盆栽を鉢に植えるところからスタートするために、パラダイス山元氏が手塩にかけて育てた桜の苗木（旭山・樹齢2年）に加え、鉢、土、底に敷く網をご提供いただき、参加者に配布した。材料の現物配布ばかりはオンラインで解決しないため、学内限定ということもあり生活美学研究所にて引き渡しの期間を設けたが、早く来た人は苗木と鉢を選ぶ余地があったため、小さくともそれぞれに枝ぶりの異なる苗木と鉢の組み合わせから好みのものを見つける楽しさも生まれた。

そしていよいよ迎えた 2021 年 3 月 12 日の本番当日、パラダイス山元氏は東京から、それぞれの参加者は自宅などの場所から zoom ミーティングに集合し、ワークショップが始まった。これまで zoom で研究会を行った際は、聴講者はカメラをオフにしていることが多かった。マイクは雑音防止のため通常ミュートをお願いしても、カメラオフをホストから強制することはないのだが、

筆者自身もそうであるように、いち聴講者としては自分の姿は映さずにいる方が気楽なのだろう。しかし、このワークショップでは学内限定ということもあり、全員カメラオンで参加してもらうよう促した。人数もマルチ画面にしたときに1ページに収まる程度だったため、画面越しではあるものの、一緒に制作を楽しむと言う和気あいあいとした雰囲気を作ることができたように思う(図3)。



図3 ワークショップ中の様子

パラダイス山元氏からは、作業の手順だけでなく盆栽の世話の仕方やマン盆栽の楽しみ方も教えていただき、「家元」から直々にマン盆栽のおもしろさ、奥深さを伝授していただく貴重な機会となった。たとえば、盆栽の世界では、用意した鉢のサイズにバランスよく収める意識をもって、つねに樹木の生育を制御していくことが望ましいというのは、一般的な鉢植えや家庭菜園の経験しかなかった筆者にとっては新鮮な考えだった。かつて、ベランダ鉢植えとしては大きい部類に入るヒメリンゴの木を育てたときは、生長に合わせてひと回り大きな鉢に移し替えることを行っていたが、盆栽では、自然に任せた野放図な生長はよしとせず、むしろ伸びた枝は切り詰め、より小さいに鉢に移し替えることもあるという。それは、しばしば盆栽に対して批判的に言われる不自然な人為の介入というよりは、手が加えられていないという意味での自然よりも、さら自然らしい自然を、人間の手でいわば再現しようという芸術的創造の試みだと理解できるだろう。風景画が自然の眺めを象徴化し、理想化し、写生的に再現するさまざまな試みのなかで自然との関係を結んできたように、あるいはまた彫刻が人体という自然と、同様にさまざまな格闘を試みてきたように、盆栽も、素材が絵具やキャンバス、石やブロンズではなく、生きた自然そのものではあるが、しかし自然をそのままに提示しているのではなく、人間による自然表象のひとつの方法なのである。

また、マン盆栽の要であるフィギュアを選択や配置については、厳格な決まりなどはなく、作

り手の自由な発想に委ねられているということをお伺いした。山元氏の作品では、ドイツ製の精巧な鉄道模型用が使われていることが多いが、樹木や鉢のサイズに合うフィギュアならどのようなものでも使用可能である。たとえば、ペットボトル商品についてくるおまけなども大いに活用可能で、実際今回は、山元氏から、以前サントリーの「南アルプス天然水」が、フィギュア制作の老舗である海洋堂とコラボしてボトルキャップ用に配布していた「野鳥」シリーズをご提供いただいた。参加者には、苗木と一緒に「野鳥」をひとつ選び、さらに自宅にある思い思いのフィギュアを組み合わせる創作してもらった。実際にフィギュアを配置してみると、限られた要素だけでひとつの場面を構成するだけに、わずかな角度や位置の違いから、「情景」の異なったニュアンスが生まれることがわかる。この点については、山元氏から、写真を撮ったり、しばらく飾ったりするために完成度を高めたい場合は、フィギュアの底に虫ピンを取り付けて土に差し込んで固定するとよいというアドバイスをいただいた。

ワークショップの最後には、参加者が自身の作品を紹介する時間も設け、「情景」に込めた想いを語っていただいた。同じ種類の樹木と同じサイズの鉢を用いても、やはり生み出される「情景」はさまざまで、こうした共有の時間にこそ、ただひとりでインストラクション動画を見て作業するのではない、ライブでのワークショップの良さがあったように思われる。盆栽は、小さな鉢の空間に制限された生命でありながら、大切に育てれば、何十年と寿命が続くのだという。今回の樹種は桜で、開催時期がちょうど開花直前だったため、直近のお花見を楽しむのはもちろんだが、ぜひ次の年にも、そのまた次の年にも花を咲かせてほしいという言葉 最後に山元氏からいただいた。

おわりに

新型コロナウイルスによるパンデミックは、生活美学研究所の活動にもさまざまな影響を与えた。しかし、手探りでスタートし、試行錯誤でどうにか乗り切った2020年度を締めくくる事業となった本ワークショップによって、パンデミックがもたらしたのは、かならずしもネガティブな影響だけではなく、示されたように思う。少し視野を広げれば、「盆栽 = Bonsai」はいまや世界的にポピュラーな趣味の活動として普及している。Yazdan Mansourian の最新の研究⁽¹⁸⁾によれば、「Bonsai」は、1982年にRobert A. Stebbinsが提唱した「真剣な余暇 (serious leisure)」に分類することができる⁽¹⁹⁾。すなわち、「忍耐力と献身」、「職業化への潜在性」、「専門知識に基づいた顕著な個人的努力」、「恒久的な個人的および社会的利益」、「社会で認められた独自の特質」、「その活動に関係した新しいアイデンティティの発達」という6つの特徴を有し、「真剣でない余暇 (unserious leisure)」や「気まぐれな余暇 (casual leisure)」とは区別される活動である。Mansourian は、youtube 動画およびそこに寄せられたコメントという「ユーザー生成データ」を調査することで、おもに英語使用者に限られた範囲ではあるが、「Bonsai」が上記6つの特徴において多くの人々に受け入れられ、コロナ禍に置かれた私たちが「よく生きること (Well-being)」に寄与してきたと指摘する⁽²⁰⁾。仕事や学業、あるいは家事・育児といった営みに比べて、「余暇」はしばしば軽視され、二の次の扱いを受ける。だが、たとえば同じく「余」の類縁である「余白」があってこそ、文字や絵が引き立つように、「余暇」は、私たちの生の根幹を支える時間であり、「場」でもあるのだ。

本稿は、2020年度クリエイティブサロンの活動記録としてここでいったん閉じることとするが、

マン盆栽ワークショップを入口として見えてきた、「情景」の問題、自然と人為の問題、「真剣な余暇」の問題には、いずれもまさに「生活美学」の本領としてまだまだ掘り下げる余地が残されている。今後の研究や研究所活動として、さらに取り組んでいきたい。



図4 筆者作《場所取り、早すぎませんか？》



図5 筆者作《PEACE》



図6 筆者作《春の出会い》

【注】

- (1) パラダイス山元『ミニチュアと樹木のテーブルガーデニング マン盆栽の超情景』、誠文堂新光社、2017 年、16 頁。
- (2) 同書、同頁。
- (3) 『精選版 日本国語大辞典』2 巻「さへの」、小学館、2006 年、「情景」の項目より。
- (4) 井上哲次郎・有賀長雄『哲学字彙』、東洋館、1881 年、17 頁（本稿では、国立国会図書館デジタルコレクション（永続的識別子：info.ndljp/pid/994560）を参照）。
- (5) J・C・Hepburn『改正増補和英英和語林集成』、丸善商社書店、1886 年、230 頁（本稿では、国立国語研究所の日本語史研究資料公開ページ（URL：https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldb/bunken.php?title=waeigorin3）を参照）。
- (6) 丸島秀夫解説「盆栽 みどりの小宇宙」、『芸術新潮』（特集 みどりの小宇宙）、2003 年 7 月号、16-17 頁。
- (7) 歌月庵喜笑著・服部良男解説『名陽見聞図会』、美術文化史研究会、1978 年、207 頁。
- (8) 同書、同頁。
- (9) 同書、207 および 208 頁。
- (10) 同書、207 および 209 頁。
- (11) パラダイス山元、前掲書、54-55 頁。
- (12) 同書、62 頁。
- (13) 同書、98-99 頁。
- (14) 歌月庵喜笑、前掲書、210 頁。
- (15) 同書、212 頁。
- (16) ロルフ・スタン『盆栽の宇宙誌』、福井文雅・明神洋訳、せりか書房、1985 年、168 頁。
- (17) 同書、167-171 頁。
- (18) Yazdan Mansourian, “Bonsai in the Time of COVID: The Miniature, the Social and the Solitary”, *Cosmopolitan Civil Societies: An Interdisciplinary Journal*, Vol. 13, No. 2, 2021, pp. 12-27.
- (19) Rbert A. Stebbins, “Serious leisure: A conceptual statement”, *Pacific Sociological Review*, Vol. 25, pp. 251-272.
- (20) Mansourian, op. cit., p. 22-25.

（2021 年 3 月 12 日、生活美学研究所本年度クリエイティブサロンの記録に基づく）

コーディネーター 武庫川女子大学生生活環境学部教授 森 田 雅 子
武庫川女子大学生生活美学研究所助手 松 山 聖 央